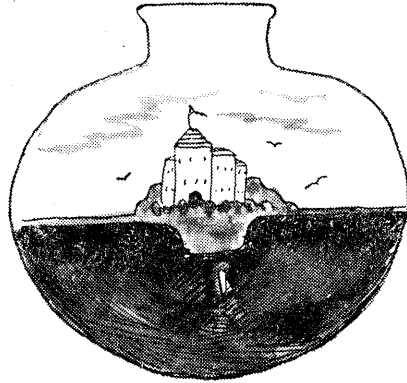


ねこふんじやった

永田栄一



日本におけるピアノの生産高は世界屈指で、家庭への普及率も高いのですが、一方、ピアノを習い始めても、途中で止めてしまう子どももかなり多いという実態があります。ピアノは、子どもたちにとって、あるいは学生や教師にとっても、一般的には、まだまだ抵抗のある楽器のようです。

ところが、多くの人が子ども時代に「ねこふんじやった」という曲を、心をおどらせて弾いたという経験をもっています。五線譜に記すと、調号にシャープが六つも付く嬰へ長

調（あるいはフラットが六つの変ト長調）というむずかしい曲ですが、ほとんどの人が、楽譜からではなく、他の人の演奏を模倣して弾けるようになります。この曲は作曲者不明で、世界の各地に遊び伝えられ、その呼び名も「のみのワルツ」（ドイツ）、「ねこ行進曲」（ブルガリヤ）、「公爵夫人」（デンマーク）、「チヨコレート」（スペイン）などと多様です。ピアノを習っていない子どもも、黒鍵をたくさん使って明るいリズムを表現でき、手と交差する部分もあるので、皆、得意になって弾きます。そして、指使いを注意されることもなく、リズムが悪いと言われることもなく、左手で半音階を弾くなど、むずかしいところがあっても、自発的な意欲で、その技を克服してしまいます。

「ねこふんじやった」は、ソロの場合も、弾き方に多少の変化が生まれているのですが、連弾の楽しみ方では、その高音部で、さまざまな変化形が遊び伝えられています。ピアノによる伝承遊びと言ってよいでしょう。中には、高音の黒鍵だけを、一本の指で順番に上がったり下がったりする弾き方や、黒鍵が三つ並んだところで、こぶしを回転させる特別の遊び弾きもあり、「ねこふんじやった」と合わせて連弾をします。

黒鍵を順番に弾いていくと、日本の唱歌や演歌によく用いられているいわゆる「ヨナぬき音階」になり、もし二つ並んでいる黒鍵の左側の音から弾き始めると、「ラドレミソラ」という日本の民謡音階になります。もちろん、子どもたちは、そんなことを意識しているわけではありませんが、日本で「ねこふんじやった」が大変流行している秘密の一つは、

こんなところにもあるのでしょうか。もちろん、曲全体のムードは、明るい西洋音楽であることは言うまでもありません。

子どもたちは、黒鍵も使いたいし、両手も使いたいです。また、連弾で友だちと手を触れ合いながら演奏する喜びを大切にしているのです。野外遊びに熱中する子どもと同じように、自発的に遊び、多様な生きた表現を生んでいます。両者の相関は明らかではありませんが、調査に協力してくれた学生に聞く限りでは、ピアノ遊びに積極的で、その表現の豊かな人は、子ども時代に、野外での伝承遊びの体験も多いようです。

ピアノの遊びを経験するだけではなく、遊びの必然としての生きたリズムを体得できる野外での遊びに興じることも、あらゆる音楽の基礎体験として大切であると言えます。子ども時代に、そのような遊びも経験せずに、楽譜の上の技を強いられても、人間的な豊かな表現を獲得することはできません。

遊びを大切にした上で、さらに、ピアノの楽しみ方を発展拡大させると、即興などの学習への導入となります。「ねこふんじゃった」は、黒鍵をたくさん使う原調での演奏が、遊びとしては楽しいのですが、ピアノソナタなどを弾くことのできる人も、調としてはもっともやさしい筈のハ長調で、この曲を弾いたという経験をほとんどもっていません。それを課題として弾かせてみますと、皆とまどいます。

ハ長調だけではなく、他の長調でも、あるいは短調でも弾くことができます。すべての

調で弾いてみますと、この曲の場合、改めて、黒鍵をたくさん使う原調での演奏が、明るいひびきで、楽しくやさしく弾けることが分かります。目で見る楽譜のむずかしさとは違うのです。

「ねこふんじやった」は、主和音と属和音だけの八小節のコードパターンが、くり返されて、手が交差する部分に発展し、次に左手に半音階が出てくるフレーズに進みます。原調のコードでは、 $G^b \cdot G^b \cdot G^b \cdot D^{b7} / D^{b7} \cdot D^{b7} \cdot G^b$ のくり返しです。連弾の場合も、それに対応する高音旋律が自由に變化して伝えられています。同じコード進行での即興は無限に變化し得る筈ですし、実際に、遊びの中で（理論は全く知らず）、子どもたちの自由な発想から、さまざまなバリエーションが生まれていることは注目に値します。

特に、黒鍵だけを、一本指で順次進行的に弾いていく連弾は、「ねこふんじやった」の和音と多少の対立するところがあっても、遊びによる生きた表現が、それをカバーしてしまえます。調査の中では演奏されませんでした。高音奏者が、両手の指を一本ずつ（おはし弾き）で、黒鍵を自由に選びながら交互に弾いたり、二つの音（隣り合った音でもよい、和音のことは考えない）を重音として同時にひびかせるような弾き方でも、「ねこふんじやった」との連弾が楽しめます。

以上のことを、全くピアノを習っていない子どもに、あるいは、作曲された楽曲の再現ばかりがピアノの演奏とと思っている学習者に、実践的に伝えますと、新しい発想でリズムを工夫しながら即興的に連弾をすることができますようになります。さらに、「ねこふんじ

「やった」のコード進行を把握し、白鍵を含めた即興旋律を用いての連弾に発展させることができることは言うまでもありません。

「ねこふんじやった」と共に、子どもたちの遊び弾きとしてよく行なわれているものに、両手の指を一本ずつ使って弾く「おはし弾き」(Chopsticks)による曲があります。日本の子どもたちに流行している曲は、「トトトのうた」の題名で「NHKみんなのうた」としても紹介されたことのある作曲者不明のハ長調ですが、五本の指を全部使わなければならない一般的な楽曲の演奏と違い、「ねこふんじやった」と同じように、ピアノを特に習っていない子どもでも、楽譜なしで喜んで弾くことができるようになります。

この曲を高音として、種々の伴奏形の連弾が遊び伝えられています。もっともやさしい伴奏は、おはし弾きで「レ(右)ソ(左)ド(右)ソ(左)」をくり返すだけです。全く初めての子どもでも、連弾の伴奏者になれます。なお、この連弾に興じた学生は、中学生の頃、映画「愛情物語」の中で、一兵士が、戦場のこわれた家で見付けたピアノで、たまたま出逢った少年に、このやさしい伴奏を受けもたせて連弾をするという感動的な場面から、音楽の楽しみ方をおぼえたと報告しています。

おはし弾きは、子どもの遊び弾きとして、西欧では古くから行なわれ、連弾で楽しまれているのです。ポロディンやリムスキーコルサコフ、あるいはリストなどは、高音部をだれでも弾けるおはし弾き「フ・ア・ソ・ファ・ソ・ミ・ラ・ミ・ラ・レ・シ・ド・ド・ド」(点を付した音は左

手、他は右手の交互弾き)を共通にして、それぞれが個性的な伴奏部を創作しています。日本の音楽も含め、世界の民族音楽を広く見渡すと、楽譜にたよらない楽曲がさまざまに演奏されているのですが、ここでは、西洋音楽の中のユニークなピアノ曲「ねこふんじやった」や「おはし弾き」などを例として、遊びを通して音楽表現を獲得することの意義を考えてみました。

参考文献

- (1) Helmut K. H. Lange, "FLOH WALZER", Edition Sikorski, 1974.
- (2) 永田栄一・桶谷弘美『ねこふんじやった』(ムジカノーツ、一九八四年)
- (3) A. Borodine, C. Cui, A. Liadow, N. Rimsky-Korsakow, N. Stecherbaheff, F. Liszt, "PARAPHRASES 24 Variations et 17 petites Pièces pour piano", Editions M. P. Belaëff. BONN, 1959.

(島根大学)